

日銀神戸

支店長の視点

大関雄資氏



明日から神無月。そろそろ衣替えだ。まだまだ暑いのが、油断しているとあつという間に秋冬物の出番がきてしまうので、毎年9月上旬までに手持ちの衣類がまだ着られるか確認することになっている。

ここ数年これが憂鬱だ。というのも、長きにわたったデフレがインフレに転換するのと歩調を合わせるかのように、五十路にさしかかった筆者のウエストも明確なインフレ傾向をたどるようになったからだ。

案の定、今回も秋冬物のスラックスはどれもこれもパンパンだった。新たに採寸のうえスーツを新調するとともに、手持ちのスラックスも修理に出しウエストを広げた。その伸び率は2%台前半。

困ったウエスト「基調インフレ」

今年だけではない。昨年も一昨年も、スラックスのウエスト出しを繰り返してきたが、伸び率はいずれも見事に2%前後。これはもはや「基調」と言っても差し支えなからう。金融政策なら満点だ。

日銀は現在、一時的な変動を除いた基調的なインフレ率が2%程度で持続的・安定的に推移するように、金融政策を運営している。

このゴールがかなり近づく中、中東情勢の混乱や人工知能(AI)関連需要の拡大などにより、基調インフレの上振れリスクが高まっている。

これを理由に今月は政策金利を引き上げ、金融緩和の度合いを調整した。

一方、筆者のウエストの「基調インフレ」が2%で定着してしまうのは困る。できれば若干のマイナスとしたいが、ただでさえ当地は酒や食の誘惑が多く、常に「上振れリスク」にさらされている。酒を控える気などは毛頭ないが、さすがにコロナ禍以降中断したままのジム通いは再開すべきかもしれない。